

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：23804

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284126

研究課題名(和文) 近世の芸能的宗教者・勸進宗教者の組織編成と地域社会

研究課題名(英文) The organization formation and community of religious people who conduct various performances and survive by solicitation in the early modern times

研究代表者

西田 かほる (NISHIDA, Kaoru)

静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授

研究者番号：50265576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)： 夷信仰の拠点である西宮神社(現兵庫県西宮市)が所蔵する江戸時代の日記や神社文書、宮司家文書を翻刻することにより、西宮神社の活動と神社に付属する宗教者の実態を明らかにすることができた。同時に、全国の夷社人関係の史料を調査することにより、その地域分布と差異を明確にすることができた。このほか、西宮神社が所蔵する近代の日記のデジタル撮影を行うことにより、今後の研究の体制を整えた。

研究成果の概要(英文)： We reprinted various historical materials of the Edo period such as diaries which Nishinomiya Shrine in Hyogo prefecture, which was the base of the cult of Ebisu, possesses, and then clarified the role, activity, and change of its Shinto priests. Additionally, we clarified their geographical distribution and existence form by researching the historical materials to be related to shajin (Shinto priests of a lower rank) who were under the dominion of the Shrine of the whole country. Moreover, we fixed the future research system by, for instance, photographing the diaries of the modern times which the Shrine possess.

研究分野：日本史

キーワード：芸能的宗教者 勸進 夷(戎、恵比寿) 近世

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の西田は、山梨・長野両県を中心に、神社組織の形成と展開について検討してきた。神職や富士山御師の身分形成のほか、雑種賤民あるいは雑芸能民などと称されてきた神事舞太夫や箆・陰陽師・万歳・力者・神子などを「芸能的宗教者」という概念でとらえることにより、神職や修験との共通性や差異を明らかにした。同時に、芸能的宗教者の配札・勸進の実態や地域社会における存在形態を、在地の史料を分析することによって解明してきた。

西宮神社(兵庫県西宮市)には、夷願人という芸能的宗教者の存在が知られていたところ、2006年から関西学院大学地域学術連携事業として西宮神社史料翻刻事業に参加する機会を得た。西宮神社には、歴代神主らが記録した神社の公用日記が残されており、関西学院大学志村洋を中心とし、岩城卓二・東谷智・幡鎌一弘とともに史料の読解作業と研究を積み上げてきた。その成果は、西宮文化研究所編『西宮神社御社用日記』第1巻(清文堂出版、2011年)、志村洋「近世後期信州の西宮えびす社人について」(『関西学院史学』39号、2012年)として公にされた。この事業を通じて、芸能的宗教者のみならず西宮神社を核とする社会構造分析の必要性が喚起された。

2012年5月には大阪歴史学会現地見学検討会「近世の西宮神社と戎信仰」が、西宮神社と西宮市立郷土資料館の協力を得て行われた。そこでは、松本和明「近世期における西宮神社の社中構造」、西田かほる「近世前期の西宮神社 他神社との比較を通して」、中野洋平(国際日本文化研究センター)「西宮夷願人とその支配」、岩城卓二「西摂津社会の中の西宮」が報告にたち、討論を通して神社内部の構造、西宮神社配下の夷願人の活動、西宮神社を含めた寺社と尼崎藩という三つの視点を提示した。本科研では、このシンポジウムでの論点を発展させ、深化させようというものである。

このような着想に至るには、いくつかの研究史的な流れがある。1980年代以降、宗教は教団や教義の研究から、朝廷をも含んだ社会構造の中で論じられるようになった。公家や大寺社を本所とした宗教者の組織化・集団化の構造が明らかにされると、同様の実態を持つ多種多様な芸能者・宗教者の存在に目が向けられるようになった。これは1990年代にはじまる「身分的周縁」研究に発展する。「神子」(西田かほる)のほか、「神道者」(井上智勝)、「陰陽師」(梅田千尋)、「祭礼奉仕人」(幡鎌一弘)などの成果を生み、宗教者および芸能的宗教者についての研究が多数蓄積された。

また、近世社会における寺社の役割については、はやくから幕藩権力の支配のイデオロギーと結び付けられてきた。近年では、東照

宮や祖先祭祀・藩祖顕彰を含めた儀礼秩序が分析され、権力論の中で神社・寺院の位置づけが注目されるようになってきている。さらには、思想や学知の研究が盛んになる中で、宗教者の学文的ネットワークや民衆教化の言説・活動などが注目され、宗教者の地域における役割や民衆とのつながりを意識した研究もすすめられている。

他方、これらの宗教者は、1980年代から始まっていた地域社会論・中間層論において明らかにされた広域訴願・議定では、しばしば排除の対象となっている。このような点から身分集団化する論理と地域側で身分集団を排除する論理の両面からとらえることが必要である。

そもそも身分的周縁論では、国家的な枠組みや集団化が強調され、地域社会との関係性をとらえる視点が後退している。しかし、身分によって集団の強さは異なり、実際には村・町の共同体あるいは他の身分集団に包摂されながら緩やかな関係性の中で存在していた。こうした側面を明らかにするには、身分集団を主体とするだけではなく、領主層を含めた地域社会から総体的にその集団を論じる必要がある。

『西宮神社御社用日記』には、神社の内部組織と身分間の紛争、西宮町・周辺村落との多様な関係性、夷願人の諸国勸進・配札の実態、薩摩・関東など流通を通して結ばれた各地の講社の存在、伝奏白川家、江戸年頭礼、尼崎藩の支配、大坂町奉行所での訴訟および同所からの触伝達など、幕府・藩・朝廷の権力・権威の輻輳など、多様な論点が含まれる。引き続き西宮神社史料を分析し、さらに民俗学・宗教学などの関連分野に切り込むことで、それぞれの専門を深め、近世における領主支配から村落社会・民間信仰・芸能史にまで新たな地平を開くことは疑いない。

2. 研究の目的

本研究では、芸能的宗教者・勸進宗教者の活動を広く近世日本社会の中に位置づけ、地域社会と宗教者の関係について分析しようとするものである。具体的には以下の4点を検討する。

(1) 全国に展開する夷信仰の拠点である西宮神社関係史料を翻刻し、宗教史研究・地域研究に資する。また、西宮神社そのものに視点を置いてその組織や活動を分析する。

(2) 夷信仰を中心とした信仰の広がりや活動する宗教者、およびその編成について、本所である公家の吉田家・白川家などとの関係を含めて検討する。

(3) 地域社会に視点を置いて、尼崎藩ないし西摂地域と西宮神社およびその他の寺社の関係を分析する。

(4) 広く地域社会(藩・村・町)における宗教者の存在意義を問う。

3. 研究の方法

研究の目的を達成するための方法は、以下の通りである。

(1)西宮神社関係諸史料の翻刻。(2)本所による宗教者支配の検討。(3)尼崎藩領内および関係する寺社史料の調査。(4)各地の夷願人・えびす講の文書調査。(5)研究成果の報告と情報共有のため、年2~3回の研究会の開催。

(1)西宮神社文書については、「西宮神社御社用日記」以外の神社文書、宮司家(本吉井家)文書、戦災で焼失したが筆写された残った宮司家文書があり、既に目録化し、デジタルカメラで撮影済みである。総計で約4,200コマあり、それらの翻刻をすすめる。西宮神社に関する調査については西宮神社宮司吉井良昭氏の協力を得て行うほか、「西宮神社御社用日記」の翻刻の任に当たっている松本和明(西宮神社文化研究所主任研究員)にも本研究に加わってもらう。

(2)本所による宗教者編成については、研究分担者の幡鎌一弘が、これまで天理大学所蔵「御広間雑記」から神職の本所である神祇管領長上吉田家と配下神職のデータを作成してきた。引き続きその作業をおこなうことにより、吉田家と西宮神社の配下願人との関係を検討する。この他、神祇伯白川家関係史料の調査を行う。各地の神職組織と願人との関係については井上智勝を中心に検討し、さらに陰陽師等の芸能的宗教者の史料蒐集については梅田千尋を中心に行う。

(3)尼崎藩と西宮神社・寺社史料の調査については、岩城卓二が中心となって尼崎藩大庄屋を務めた岡本家文書にある上瓦林村内日野神社関係文書、尼崎地域研究史料館所蔵・寄託の尼崎城下貴船神社文書等の村方寺社文書、尼崎城下に所在する法華宗本門流本山本興寺文書などを活用し、藩政史・村落史・畿内近国研究と関係させながら検討する。この他、畿内近国の在地史料の調査は山崎善弘を中心に行う。

(4)地域社会と宗教者の関係については、すでに着手している長野県内の願人関係史料を志村洋が中心となって調査するほか、藩・村・流通という側面から、多様な夷信仰像を析出するために、各地において文書調査を行う。研究分担者・連携研究者・研究協力者全員が分担して全国の自治体史や資料保存利用期間などに出向き、調査を実施する。藩政との関係は東谷智、恵比須講関係史料は中川すがね、西国地域の宗教者に関しては引野亨輔を中心に調査を行う。同時に、『西宮神社御社用日記』や吉井家文書などに登場する各地の下願人や講社について調査する。西宮神社文化研究所編『近世諸国えびす御神影札頒布関係史料集』(2011年刊)には、西宮神社の配下願人の情報が盛り込まれており、現在も続く各地の講社の情報提供を受けながら、調査を進める。

4. 研究成果

成果を研究方法に従って示すと、下記の通りである。

(1)西宮神社所蔵の諸史料の翻刻については、神社文書全点(75点、130,000字余)の翻刻を終えた。宮司家(本吉井家)文書については、285点のうち約8割の翻刻を終えることができた(482,300字余)。このほか、戦前の筆耕資料(389点)については、入力データの校正を終え、『西宮神社文書』第1巻として刊行することができた。「御社用日記」については、『西宮神社御社用日記』3巻、4巻として刊行している。

明治期以降の「御社用日記」は未撮影であったため、明治2年~平成16年までの120冊について、デジタルカメラによる撮影を行った。これにより、今後の調査・研究の便をはかることができた。

(2)本所による宗教者編成については、吉田家の「御広間雑記」の正徳から享保期のデータを抽出することができた。この他、神職関係としては白川家学頭臼井雅胤の日記を翻刻するなどした。

芸能的宗教者の調査としては、奈良県春日若宮祭礼の奉仕者や山梨県・長野県などでの神子、舞太夫、陰陽師の調査をおこなった。さらに陰陽師の本所土御門家の文書調査を行うとともに、陰陽師の家職に関する暦などの調査もおこなった。

(3)尼崎藩と西宮神社・寺社史料の調査については、尼崎城下の本興寺の調査を行い、『本興寺文書』3・4巻を刊行した。ほかに兵庫県神戸市東灘区の本住吉神社所蔵史料の調査を行った。

(4)各地の夷願人などの文書調査については、共同調査として2013年に埼玉県立文書館において西角井家文書の蒐集にあたった。2014年には、千葉県勝浦遠見岬神社所蔵文書の調査と千葉県立文書館で勝浦市久我家文書をはじめとする諸家文書の調査を行った。

本研究に携わる全員で全国各県別に分担を決め、それぞれ自治体史の確認、文書館や図書館などの資料保存利用機関、教育委員会などにおいて目録の検索と史料の蒐集にあたった。一通り調査を行った地域は、沖縄県、鹿児島県、熊本県、福岡県、大分県、長崎県、佐賀県、宮崎県、高知県、徳島県、愛媛県、兵庫県、和歌山県、京都府、富山県、福井県、石川県、愛知県、静岡県、山梨県、長野県、神奈川県、千葉県、東京都、群馬県、栃木県、茨城県、福島県、山形県、岩手県、北海道である。ここで蒐集した史料の一部は『近世諸国えびす御神影札頒布関係史料集』第2巻に収録し、成果報告の一つとした。

(5)研究成果の報告と情報共有のための研究会を6回実施し、ゲストスピーカーを含め、16本の研究報告を行った。松本和明「近世西宮神社における開帳の諸相」、幡鎌一

弘「西宮神社御社用日記を裏側から読む」、橋本鶴人「神事舞大夫の『筋目』に関する事例紹介～他の宗教者との関係を中心に～」、志村洋「近世後期武州・上州のえびす社人史料について」、横山陽子「近世会津・仙道地域の西宮社人」、北川央「水戸大神楽と西宮夷願人～関東の大神楽における水戸大神楽の位置～」、松本和明「東海地域のえびす願人についての一事例 遠江国榛原郡岡田村池田家文書の紹介」、志村洋「享保6年須藤但馬日記にみる東国願人改めについて」、志村洋「佃島住吉神社文書にみる西宮社江戸支配所役人」、山崎善弘「動化・廻在者と地域社会 摂津国幕領を中心に」、戸田靖久「近世西宮町の非人について」、松本和明「西宮神社史料からみた元禄五年寺社改め」、戸田靖久「延享元年西宮社御開帳参拝をめぐる渡辺村穢多との「争論」について」、井上智勝「福島方面調査報告」、東谷智「豊後佐伯藩における浦方支配とえびす信仰」、梅田千尋「加賀・若狭・紀州の「えびす」信仰史料について」である。

最終年度には、成果報告として2回のシンポジウムを開催した。1回は西宮地域への成果還元を目的とするもので、西宮市立郷土資料館と共催で「『西宮神社御社用日記』を読む」を実施した(2016年8月13日、於西宮市立郷土資料館)。報告は、幡鎌一弘「『西宮神社御社用日記』と『白川家日記』 正徳の争論の裏側」(シ1-)、志村洋「西宮神社の江戸支配所と西宮商人」(シ1-)、松本和明「西宮神社の祭礼と氏子・参詣者」(シ1-)とし、コメンテーターを衛藤彩子(西宮市立郷土資料館学芸員)として西宮神社と西宮地域との関わりを軸にシンポジウムを行った。

2回目のシンポジウムは研究者へ向けたものであり、「西宮えびす信仰の担い手とその広がり」と題した(2016年12月3日、於関西学院大学東京丸の内キャンパス)。報告は、岩城卓二「尼崎藩の寺社支配」(シ2-)、山崎善弘「近世畿内における地域管理体制とその特質 動化・廻在者の取締りをめぐって」(シ2-)、志村洋「兼業としての夷願人」(シ2-)、松本和明「近世西宮神社の名古屋支配所について」(シ2-)、西田かほる「近世の芸能的宗教者・勤進宗教者」(シ2-)とし、コメンテーターを林淳(愛知学院大学)パネラーを吉井良昭(西宮神社宮司)として、西宮神社および夷社人を多角的に考察した。

これら(1)～(5)の成果の一部として、雑誌論文9件、学会発表5件、図書14件を公表することができた。公表された成果の本研究における位置づけと、今後の展望は、以下の通りである。

第一の成果は、西宮神社関係史料の翻刻およびその刊行である(図書:1, 2, 4, 12)。そもそも江戸時代の神社の日記は、これまで本格的な調査が行われてこなかった。量が膨

大であるために、かえってその有用性が明らかにされず、かつ散逸のおそれも少ないと考えられてきたためである。ただし、実際には明治期の廃仏毀釈や神職の移動、祭式や神事の改変、アジア太平洋戦争などによって多くの史料が散逸・滅失し(橋本政宣「近世の神社日記」『悠久』77号、1999年)、あるいは忘れ去られた。そのような中で、西宮神社では17世紀末から今日に至るまでの日記が継承されてきた。神社や宮司家の古文書は戦禍で焼失したと言っても、その一部は伝存したのである。しかも西宮神社はえびす信仰の拠点として、各地に配下を有していたために、関係する史料が全国各地に残されることになった。それらの全体像を明らかにすべく調査を行い、史料を翻刻していくことは、江戸時代の宗教研究や地域研究に大きな意味を持つものと自負する。

成果の二つ目は、「御社用日記」の刊行作業を通じて、西宮神社の社中構造の解明がすすんだことである。西宮神社は、17世紀には神主・社家、祝部、神子、願人など30名ほどで構成されていた。日記の詳細な分析から、社中の神職の活動や他職との争論などを通じて、それぞれの職掌や権限が定まってくる過程が明らかになった(松本和明「近世西宮社における開帳と社中構造」『人文論究』65、2015年)。正徳3年(1713)に本所白川家も巻き込んだ大規模な社中争論についても、藩や西宮町の動向も含めた詳細な検討がなされた(幡鎌:報告・シ1-)。この争論の結果、本所白川家は執奏停止となり、社中構造も激変する。例えば当時6家あった社家は1家のみとなり、社中の維持管理や諸国散在願人から役銭を徴収していた願人頭が追放となった。これにより、神主に神社の諸権限が集中していくことになる。夷願人の支配が神事行為を禁じられた俗人の願人頭から神主に移行したことによって、以後、願人は社人として位置づけられ、同時に吉田家配下の神職が夷札を配ることも可能になったと考え得る(西田:シ2-)。西宮神社の社中構造の変化は、社中のみならず、本所や諸国に散在する配下にも大きな影響を与えることになった。社中の構造変化を知ることによって、神社を取り巻く諸関係の整理が可能になったのである。

また、西宮神社の組織の中で、これまで具体的な検討がなかった江戸支配所と名古屋支配所についての研究もすすんだ。支配所の開始時期や支配人の様態のみならず、西宮町人の広域的な商業活動や領主権力の保護と統制といった多様な論点を提示することができた(志村:論文3、松本:シ2-)。

同時に社中構造のみならず、神社の運営や経営に関わる氏子や参詣者の分析をおこなうことにより(松本:シ1-)、西宮神社への信仰の具体像を知ることができた。

成果の三つ目は、悉皆的な配下文書の所在調査を行ったことである。そこから分かった

ことの一つは、西宮神社の配下は圧倒的に東国に偏っていたことである(図書2)。えびす信仰や西宮神社の存在は全国的に確認できるものの(東谷:報告、梅田:報告)、西日本で配下が確認できるのは、紀伊、丹波、但馬、播磨、美作、備前、備中、淡路、阿波、土佐のみである(吉井良昭氏による)。この状況は従来から指摘されていたが、今回の調査で再確認することができた。西宮神社は寛文3年(1663)に徳川家綱から社殿造営のための資金調達として、社中願人に夷絵像の頒布と散在願人からの役銭徴収を認められた。幕府権威の下での配下編成であったことが地域的な偏差を生んだと考えられるが、これについてはさらなる調査が必要である。

また配下文書の調査を通じて蒐集した資料の分析から、夷職の多様な存在形態が明らかになったことは大きな成果である。夷職の一門あるいは家内で万歳・大神楽などの他職を兼業したり、夷職が株化し株の所有者と実際の配札人が分離したりする事例のほか、檀那場の分析、夷職の地域的ネットワークなど、これまで知られていなかった事実が次々と明らかになった(図書2、志村:論文2・4・6・9・シ2-、松本:報告、井上:報告)。これらの事例によって、「えびす」という身分についての議論も喚起された。

成果の四つ目は、夷職の多様性にも関連し、芸能的宗教者・勸進宗教者の個別事例の蓄積や職分の検討が進んだことである(梅田:論文8、図書5・6、西田:論文5、シ2-)。夷職や陰陽師、万歳、舞太夫といった人々は、これまで別々に研究の対象となっていたが、それを芸能的宗教者・勸進宗教者という概念でくくり、除地などの土地や宗教施設の有無、本所支配、勸進や檀那場といった職分に関わる家産のあり方、地域での役割などに着目して、神職や修験あるいは百姓などとの共通性や差異を明らかにしてきた。それは同時に芸能的宗教者という枠組みで捉えた人々の同一性・共通性の析出と地域・時期・地域社会のあり方の違いなどによる差異を解明する試みであり、存在形態の曖昧さ・多様性を含む豊かな実態の提示である。これまでの研究に基づいた実証的な総論も出され、今日の議論の到達点を示すことができた(梅田:図書8・11)。

成果の五つ目は、西宮神社を取り巻く地域社会のあり方にせまったことである。『本興寺文書』(図書:3,13)に触留書や願書・届書などが収録されたことによって、尼崎藩および広域支配をおこなう大坂町奉行所と寺社との関係を考察する基礎が整った(岩城:シ2-)。さらに西摂地域から見た廻在者としての夷職への対応についても検討することができた(山崎:シ2-、発表1~4)。このほか、大和国における興福寺や春日社の近世化の特質が明らかにされたことにより(幡鎌:図書7)畿内近国他社との比較検討を通じた西宮神社の特質が明確になると考える。

今後の展望としては、引き続き西宮神社の諸史料の翻刻、刊行と、全国の夷職関係および芸能的宗教者・勸進宗教者の史料の蒐集にあたっていくことにより、近世史・宗教史・地域史にとって欠くことのできない基盤整備としたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 9 件)

1. 幡鎌一弘「臼井雅胤日記三点」『天理大学おやさと研究所年報』23号、2017年、1-21頁、査読なし。
<http://opac.tenri-u.ac.jp/opac/repository/metadata/4211/0YS002317.pdf>
2. 志村洋「幕末の夷願人と株上野国利根郡を事例に」『関西学院史学』44号、2017年、1-28頁、査読なし。
3. 志村洋「西宮神社の江戸支配所について」『人文論究(関西学院大学人文学会)』65-4号、2016年、19-46頁、査読なし。
4. 志村洋「近世の勸進宗教者の『二面性』について」『歴史科学』224号、2016年、1-15頁、査読なし。
5. 西田かほる「近世中期における甲斐国陰陽師の動向」『静岡文化芸術大学紀要』16号、2016年、43-53頁、査読なし。
<http://id.nii.ac.jp/1132/00001076/>
6. 志村洋「近世後期の勸進宗教者と地域社会 相模国藤沢のえびす社人を事例に」『人文論究(関西学院大学人文学会)』64-4号、2015年、1-31頁、査読なし。
<https://kwansei.repo.nii.ac.jp/>
7. 中川すがね「大阪町人平野屋武兵衛の「例歳式目帳」」『人間文化』30号、2015年、129-167頁、査読なし。
<http://kiyou.lib.agu.ac.jp/titles/>
8. 梅田千尋「近世本所の家伝と家職「陰陽道」像の模索」『歴史評論』771号、2014年、51-62頁、査読なし。
9. 志村洋「村共同体における勸進宗教者 信州諏訪地方を事例に」『東京大学日本史学研究室紀要』別冊、2013年、351-367頁、査読なし。

[学会発表](計 5 件)

1. 山崎善弘「Large-scale Petitionary Protests (Kokuso) and Bakuhan System」Association for Asian Studies 2017 Annual Conference 2017年3月15日~21日:トロント(カナダ)。
2. 山崎善弘「Large-scale Peasant Movements (Kokuso), the Tokugawa Bakufu, and Domain Lords」The International Conference on Japan & Japan Studies 2016、2016年6月2日~5日、兵庫県神戸芸術センター。
3. 山崎善弘「勸化・廻在者と地域社会 摂津国幕領を中心に」高円史学会、

2015年11月14日、奈良県奈良市、奈良教育大学。

4. 山崎善弘「近世畿内における地域管理体制とその特質 勸化・廻在者の取締をめぐって」東北アジア文化学会第31次国際学術大会(2015年度秋期大会)東亜大学校：釜山(韓国)。
5. 志村洋「近世の勸進宗教者の『二面性』について」大阪歴史科学協議会、2014年9月10日、大阪府大阪市、関西学院大学梅田キャンパス。

〔図書〕(計 14 件)

1. 西宮神社文化研究所編(松本和明総監修、井上智勝・岩城卓二・梅田千尋・志村洋・幡鎌一弘・中川すがね・東谷智・西田かほる・引野亨輔・山崎善弘監修)『西宮神社文書』1巻、清文堂、2017年、345頁。
2. 西宮神社文化研究所編『近世諸国えびす御神影札頒布関係史料集』2巻、西宮神社、2017年、422頁。
3. 本興寺編(岩城卓二・上野大輔・幡鎌一弘・三浦明監修)『本興寺文書』3巻、2017年、375頁。
4. 西宮神社文化研究所編(志村洋・松本和明総監修、井上智勝・岩城卓二・梅田千尋・幡鎌一弘・中川すがね・東谷智・西田かほる・引野亨輔・山崎善弘監修)『西宮神社御社用日記』3巻、清文堂、2016年、470頁。
5. 梅田千尋「『曆占書』の出版と流通」『シリーズ本の文化史』4巻、平凡社、2016年、2016年、109-139頁。
6. 梅田千尋「陰陽道祭文の位置」『祭文部類』を中心に』『神楽と祭文の中世』1巻、思文閣出版、2016年、47-69頁。
7. 幡鎌一弘『寺社史料と近世社会』宝蔵館、2015年、449頁。
8. 梅田千尋「身分制社会の中の民間宗教者」『シリーズ日本人と宗教 6巻 他者と境界』春秋社、2015年、115-141頁。
9. 西田かほる「女性宗教者の存在形態 神社神子から」『シリーズ日本人と宗教 6巻 他者と境界』春秋社、2015年、88-114頁。
10. 中川すがね『幕末風聞録 - 旧小坂田村の「諸事覚日記」』伊丹市立博物館、346頁。
11. 梅田千尋「近世の神道・陰陽道」『岩波講座日本歴史 近世3』岩波書店、2014年、249-281頁。
12. 西宮神社文化研究所編(志村洋・松本和明総監修、井上智勝・岩城卓二・梅田千尋・幡鎌一弘・中川すがね・東谷智・西田かほる・引野亨輔・山崎善弘監修)『西宮神社御社用日記』2巻、清文堂、2013年、491頁。
13. 本興寺編(岩城卓二・上野大輔・幡鎌一弘・三浦明監修)『本興寺文書』2巻、2013

年、454頁。

14. 幡鎌一弘「大和土の歴史とつとめ」『平成二十五年度特別陳列 おん祭と春日信仰の美術』奈良国立博物館、2013年、12-17頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

西田 かほる (NISHIDA, Kaoru)
静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授
研究者番号：50265576

(2)研究分担者

井上 智勝 (INOUE, Tomokatu)
埼玉大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：10300972

岩城 卓二 (IWAKI, Takuji)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：20232639

梅田 千尋 (UMEDA, Cihiro)
京都女子大学・文学部・准教授
研究者番号：90596199

志村 洋 (SIMURA, Hiroshi)
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：90272434

幡鎌 一弘 (HATAKAMA, Kazuhiro)
天理大学・付属研究所・教授
研究者番号：50271424

中川 すがね (NAKAGAWA, Sugane)
愛知学院大学・文学部・教授
研究者番号：80227743

東谷 智 (HIGASITANI, Satoshi)
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：10434911

山崎 善弘 (YAMAZAKI, Yoshihiro)
奈良教育大学・教育学部・特任准教授
研究者番号：60582509

(3)連携研究者

引野 亨輔 (HIKINO, Kyouzuke)
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：90389065

(4)研究協力者

松本 和明 (MATUMOTO, Kazuaki)
西宮神社文化研究所・研究員